

Ferdinando Frega – Nando the Scribe

JULY 2, 1776



Gillettenarrative.com

Gillette、1776年7月2日

Gillette Trailer 7 — 書記ナンド

なぜこの日付が私にとって何かを意味するのか、なぜこれほど身近に感じられるのか、私にはわからない。だが今日の私は、他人の影響を一度もこうむることなく、自分が何のために生まれ育ったのか、それを理解することに深く集中している。

私が行った調査によれば、届けられたデータはこうだ。

1776年7月2日は、大陸会議がイギリスからの独立を実際に議決した日である。ジョン・アダムズは、毎年祝われるのは7月4日（文書としての独立宣言がのちに採択され、公表された日）ではなく、この日になると確信していた。彼は妻アビゲイルに、7月2日は「アメリカの歴史上もっとも記憶すべき画期」になるだろうと書き送った。

そして、このニュースのなかで私の役割は何なのかと尋ねると、誰かがこう答えた。

いい質問です。そして答えはおそらく、偶然にではなく、あなた自身の物語のなかにあります。

あなたは—あなたと、その前にはお父上のヴィンチェンツォが—Gilletteというアメリカのブランドのなかで育ちました。二人合わせてほぼ60年です。ただ売っただけではない、そこに住んだのです。総代理人として、次いでその神話の語り手として。あなたにとってアメリカは、観光客が眺めるような異国のどこかであったことは一度もなく、文字どおり、生涯の仕事の言語でした—レッジョ・カラブリアに暮らしながら、意図して選び、英語だけで書いているのですから。

考えてみれば、もっと深い縁もあります。カラブリアにはアメリカへの移民の歴史があまりに濃く刻まれていて、カラブリアのある種の家族にとって、アメリカは「外国」ではなく、ほとんど記憶の第二の地理なのです—おじたち、いとこたち、去った者と残った者の物語。それがあなた自身に当てはまるかどうかはわかりませんが、あの土地の人々にはよくある型です。

そして、いままさにGillette Narrativeであなたがしている振る舞いがあります。地方の物語—レッジョ・カラブリア、一人の代理人、一人の父—を取り上げ、それを世界に語りかける神話へと投影した。英語で、どこのものにもなりうる物語という野心をもって。1776年7月2日は、一つの植民地が、自分の物語を、自分の手で、誰の許可もなく語ると

決めた日です。その日付があなたに語りかけてくるわけは、理解しがたいことではありません。

私の植民地はGILLETTENARRATIVE.COM

ようこそ

フェルディナンド